

教務だより

2018年2月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

合格はゴールじゃない…。

茗溪塾塾長 宇野 雅春

中学受験が終了し、高校受験も最後の公立高校へ向けて追い上げの時期です。大学受験は日程が経つにつれ私立難関大学入試そして国立大学入試へと移っていきます。

受験生のだれもが今までにたく頑張っている…時々、黙々と頑張っている様子に胸が熱くなることもあります。その理由の中には昨今の「勉強しない」生徒の増加の風潮があります。「ゆとり教育」が終わり、学習内容も増えているというのに、勉強に対して消極的な生徒が増えている感じは否めません。「やれることしかしない」「興味のあることしかしない」という子供が増えている気がするの、気のせいでしょうか？

文科省が警鐘を鳴らし、教育改革が進められる背景には日本の勉強しない大学生の実態があると言われています。戦後の日本の教育の目標は、「先進諸国に追いつく」でしたから、「知識技能」を受動的に習得する能力ばかりが問われ、受験も知識技能の習得に偏ってきたと思います。大学で学んだことが、仕事に役立たないのは、すべてが「知識」に過ぎないというのがその原因だと思います。「知識」はいずれ忘れます。

受験自体の改革が今進められようとしています。上級学校で学ぶための基礎作りが「受験勉強」になるということ…示されているのは「学校で学ぶ」ということが、より具体的な力の養成につながり「現実の社会生活」を充実させ豊かにするものになるという方向性です。英語によるコミュニケーション能力の育成は、グローバル社会においてすべての場で必要不可欠なものになってきています。小学校での英語の導入は新指導要領が施行される2年後を待たず、今年から自治体ごとの判断にゆだねられながらも急速に進むことは間違いありません。すでに完全実施に踏み切る自治体もできます。

受験勉強も「学ぶ」喜びを獲得するものにならないと将来を生き抜く価値ある体験にならない気がしてなりません。「合格」「不合格」が飛び交う中でこの文を書いています。飛び上がりたいほどの合格やドーンと落ち込む不合格も、結局はそこから何を学び取ってどう次の成長につなげるのかの通過点に過ぎない気がしてしまいます。

大切なことは成長すること。「与えられたものをいかに吸収したか」から、激動し変化する現実社会で問題を人と協力して解決し、より豊かに過ごせる力の獲得へ…時代はその方向に進むはずで

「合格」はゴールではなく次の始まりであるということに肝に銘ずる必要があります。即効性を求められ、生徒は合格に必要なことだけを端的に追い求め、無駄なことはしたくない…そんな傾向が、結局は強引な詰め込み指導をつくり、子供の想像力や伸びる芽を摘み取るだけにとどまらず、「合格に到らない」ものになるということです。受験が終わって何事か成し遂げたと燃え尽きるには、課題が多すぎです。何のためにその学校に行くのかさえ見失わなければどこにでもチャンスはあるはずで、合格も不合格も要するに新たなスタートを切る大きな転換点だと思います。